

文献研究による言語発達チェックリスト作成への試み

本 保 恭 子

(ノートルダム清心女子大学)

I はじめに

小児科外来や児童相談所を訪れる発達初期の小児の主訴として、「ことばの遅れ」が多くみられる。訴えの内容は均一ではなく、1) ことばを話さない、話しことばの数が少ない、2) ことばの理解が悪い、3) ことば以外の面にも遅れがみられる、4) 発音が悪い、赤ちゃんことばである、5) 会話にならない、などが含まれている。言語発達は運動発達以上に個人差が大きいため、どこまでが正常かを見極めることが困難な場合がしばしばある。しかし、ことばの遅れの中には、多少余裕を持って対策を考えてもよいものや特別な配慮や治療は不要なものもあるが、至急診断して対策を講じるべきものもある。したがって、これらの言

語発達遅滞について早期に鑑別診断し、適切な対応がなされることが言語発達遅滞児の予後にとって重要なこととなる。そこで、研究者諸家の言語発達遅滞の早期鑑別診断について文献研究を行った。

II 言語発達チェックリスト作成への試み

言語遅滞として発見されたもののうち、その後精神発達障害に発展する危険性の高い児をハイリスク児として把握し、これらケアの必要な児と、その後順調に言語獲得していくと予測されるケアの不要な児とに大きく鑑別するための判断基準を明らかにしようと試み、言語発達チェックリストを作成した。

1 言語理解・言語表出・対人関係・行動面からみた言語発達チェックリスト

表1では、月年にしたがいい言語理解・言語表出・対人関係・行動について①～⑬までのチェックリスト項目を設けている。発達性言語障害・精神遅滞・自閉症の3群の言語遅滞は1歳6か月までの行動発達に関して、健常児とは異なり、①笑う②喃語③泣く④人見知り⑤模倣⑥後追い⑦活発さ⑧三項関係⑨ふり向き⑩指さし⑪視線⑫他児への関心⑬多動(緩慢)という乳児期の行動特徴があると考えられる。13項目以外に、発語状況としては1歳6か月までに単語が2つ以上定着しているかどうか重要なチェック項目である。また胎生期・周生期の障害の有無、ひきつけ・大病などをしたことがあるか、両親に幼児期の言葉の遅れがあったかどうかの項目も関連がある。

表1 言語理解、言語表出、対人関係、行動面からみた言語発達チェックリスト

月 齢	対人関係	発声活動
0 : 3		①あやすと声を出して笑いますか ☐ いい ☐ いい
0 : 4		②喃語がありますか(アーア、ウーウー等) ☐ いい ☐ いい
0 : 5		③外からの刺激に対して笑顔や泣いて反応しますか ☐ いい ☐ いい
0 : 6	④人見知りをしますか ☐ いい ☐ いい	
0 : 10	⑤簡単な模倣(イナイ・イナイパー、パンザイ、バイバイ等)をしますか ☐ いい ☐ いい	
0 : 12	⑥母親への後追いをしますか ☐ いい ☐ いい	
初歩以前	⑦おとなしくて手のからない子でしたか ☐ いい ☐ いい	

年 齢	言語理解	言語表出	対人関係・行動
1 : 6	⑧「戸をしめなさい」「新聞もってきて」などの簡単な言語指示に応じますか ☐ いい ☐ いい	*発語が単語として2語以上定着していますか ☐ いい ☐ いい	①視線が合いますか ☐ いい ☐ いい
	⑨自分の名前をよばれたらふり向きしますか ☐ いい ☐ いい	⑩自発的に絵本など、知っているものを直接指さして名前を相手に教えることができますか <指さし行動 第2段階> ☐ いい ☐ いい	②他児への関心がありますか ☐ いい ☐ いい
	⑪相手から聞かれたら指さしをしますか <指さし行動 第1段階> ☐ いい ☐ いい	⑫離れた対象(小鳥、人自動車、お菓子など)を<指さし行動第2段階>と同様にできますか <指さし行動 第3段階> ☐ いい ☐ いい	③多動(又は緩慢)ですか ☐ いい ☐ いい

☐胎生期・周生期障害がありましたか
☐ひきつけ、大病などをしたことがありますか

☐両親に幼児期の言葉の遅れがありましたか

2 言語発達遅滞児（発達性言語障害・精神遅滞・

自閉症）の乳児期の行動特徴

表2では、3群の言語発達遅滞児の乳児期の行動特徴をまとめている。

発達性言語障害（DS）は、⑤模倣と⑧三項関係は達成できることから、知的正常、言語の比較的予後良好との一般的特徴の一端がすでに1歳6か月までの時点で先取りされているといえる。自閉症（AU）は、1歳から1歳6か月までのすべての項目につまずいており、DSと精神遅滞（MR）よりもはるかに広範な乳児

期の行動発達上の遅れを、言語獲得以前にすでに顕在化させているといえる。

3 1歳6か月時点における

言語発達レベル鑑別プロセス

図1は1歳6か月時点における言語発達レベルを、どのような流れでタイプ分けするかを鑑別プロセスを示したものである。「言語遅滞型」は3歳時点でも正常化せず、後に発達障害へと発展する危険性の高いものと予測される、ケア必要群である。これと対照的に「晩成型」は単なる発語のみの出遅れであり、ほかの13項目は全く正常であるから、ケア不要群である。また、「境界型」は「言語遅滞型」と「晩成型」の中間に位置する型で、3歳時点までに正常化するものと、反対に発達障害へと移行するものに二分され、ケア必要群である。「環境因性多動型」は、一種の情緒障害といえるのでケア必要群とする。

4 1歳6か月から3歳への転帰

「精神面」における発達障害が主に言葉の遅れとして気づかれること、この発語が1歳6か月までに通常出現し得ることから、1歳6か月時点は言葉の遅れを主体とした精神発達障害の早期発見、早期ケアの時期と指標として位置づけられる。図2は、1歳6か月時点で言語発達レベルの程度で分類された各型が、3歳までにどのような経過・転帰をたどるかを予測したものである。「晩成型」の発語状況をみると、1歳6か月時点で発語「無」が大部分でありながらも、その後すべて言語獲得が順調であるのが特徴的である。「晩成型」は、3歳時点で2

表2 言語発達遅滞児（発達性言語障害・精神遅滞・自閉症）の乳児期の行動特徴

言語発達チェック項目													該当項目数	予想される診断名
①笑う	②喃語	③泣く	④人見知り	⑤模倣	⑥後追い	⑦活発さ	⑧三項関係	⑨ふり向き	⑩指さし	⑪視線	⑫他児への関心	⑬多動（緩慢）		
				○			○	×	×	×		×	共通4項目を含めて合計6項目以上	発達性言語障害（DS）
						×	×		×			×	共通4項目を含めて合計8項目以上	精神遅滞（MR）
						×	×	×	×	×	×	×	共通6項目を含めて合計9項目以上	自閉症（AU）

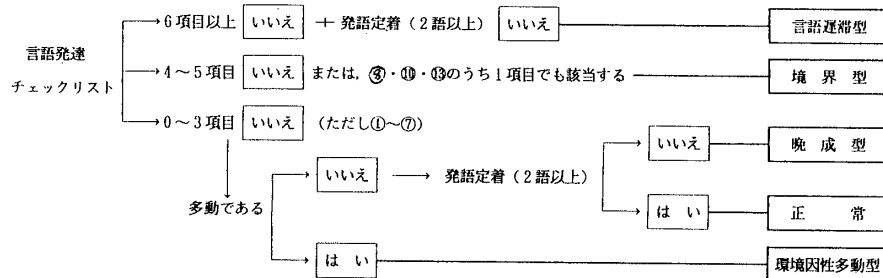


図1 1歳6か月時点における言語発達レベル鑑別プロセス

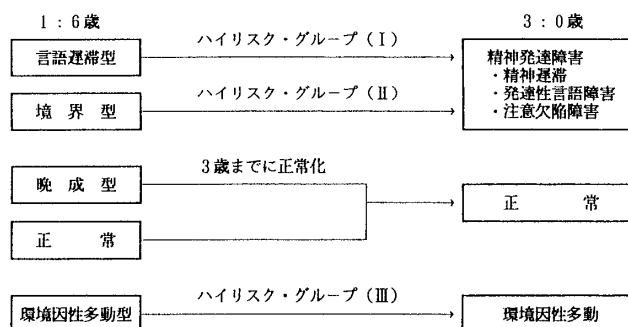


図2 1歳6か月から3歳への転帰

語以上獲得していることから、遅くとも3歳までには正常化するといえる。

III おわりに

1歳6か月という発達段階における言語発達の良否を判断するにあたり、発語状況だけでなく、行動発達を総合的に検討することが重要である。1歳6か月時点で、発語が2語以上定着せず、13項目中不通過の項目がある場合はフォローの対象にするのが妥当である。作成した言語発達チェックリストは、将来発達性言語障害などへ発展する可能性の高いハイリスク児を早期に発見する方法として活用し得るものであろう。